

うみっこ通信

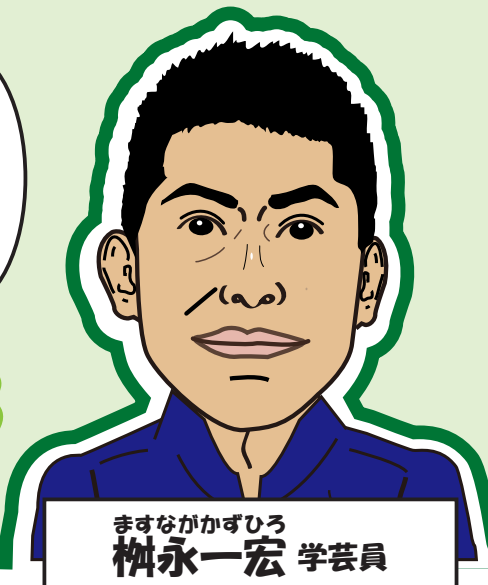


滋賀県立
琵琶湖博物館

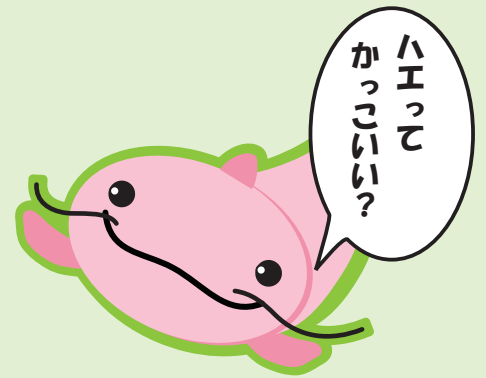
LAKE BIWA MUSEUM



教えてください



ますながかずひろ
榎永一宏 学芸員



ハエって
かっつるん?



海岸で採集している様子

世界を旅する 昆虫採集

2013.3
No.9

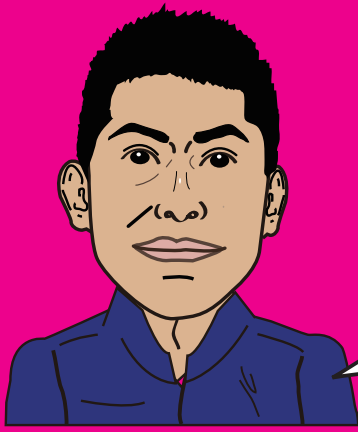
昆虫の多くは陸地で生活していますが、一部に陸地から水辺に生息範囲を拡げた仲間がいます。榎永学芸員はそのような湖や河川、海岸などにすむハエ類を20年以上にわたり研究しています。日本国内のみならず、世界中に採集に行き、沢山の標本を集め、新種を見つけています。

今回は、水辺のハエ類の研究について、研究の魅力や、海外での採集方法・博物館の施設を利用した研究の進め方について紹介してもらいます。

また、4月2日(火)よりはじまる今年度最初のギャラリー展示「近江の博物学者 橋本忠太郎－植物研究にかけた情熱－」を紹介します。

目次

- 1 今回の特集
- 2 アシナガバエってどんな虫?
- 3 研究の様子を大公開!
- 4 うみっこトピックス「近江の博物学者 橋本忠太郎－植物研究にかけた情熱－」



色のき
んだハれ
だよ！
いも
ない

【研究紹介】 アシナガバエって どんな虫？



【写真1】葉の上で小さな昆虫を捕食するマダラホソアシナガバエ

アシナガバエはどんな虫？

アシナガバエは、水辺で生活していて、幼虫も成虫も小さな虫を食べる昆虫です。世界から7,000種類、日本から100種類ほど知られています。寒いところ、暑いところ、高山の溪流から海岸の波打ち際まで世界中で見られます。

なぜアシナガバエの研究をはじめたの？

小学生の頃から昆虫の新種を見つけたいと思っていました。大学で昆虫の研究を始めるときに、まだまだ新種がいるハエを選びました。そのなかでも、きれいな色をしているアシナガバエにしました。



【写真2】博物館にあるDNAを調べる装置

ハエを研究するとなにがわかるの？

生物の種類の豊かさや形の多様さを知ることができます。DNAの遺伝情報と地形や環境の変化を比べると、どのくらいの時間で形態が変化し、ちがう種類になっていくかがわかります。



【写真3】チリで外来種の日本のキタイソアシナガバエ

ハエにも外来種が？

チリの海岸に、もともと日本にしかいなかったアシナガバエが見つかりました。日本と貿易している港のそばなので、船で運ばれた可能性があります。

研究していて楽しいことは？

世界中の山の溪流、海岸、離島など、普段観光客が訪れない場所に行き、めずらしい生き物や景色をみることができます。また、世界中の研究者と友達になれるのも楽しいことです。



【写真4】チリで見かけたマゼランペンギン



いいね！

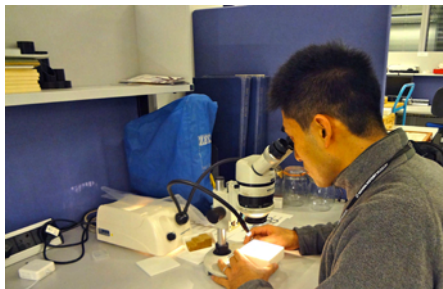
ボクも世界中をめぐるたいなァ！

研究の様子を 大公開！

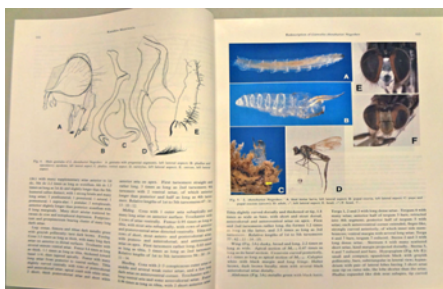
新種を見つけたら、大
ニュース！？研究って
面白い！



【写真1】採集に必要な7つ道具



【写真2】イギリスの博物館での
研究の様子



【写真3】学術雑誌に掲載された
アシナガバエの論文



【写真4】コスタリカの国際会議で
研究発表

① どこで採集するの？

山の溪流や海岸の水辺で採集します。アシナガバエの進化を調べるためには日本の種類だけを調べてはわからないことがあるので、世界各地に調査に出かけています。

② どんな道具を使いますか？

虫はやわらかい昆虫網で捕まえ、つぶさないように吸虫管で吸い込みます。そして持ち帰るためには、ピンセットを使い、アルコール瓶や三角紙にいれて、大切に携帯用の標本箱にいれて持ち帰ります。

③ とった虫はどうするの？

採集した虫を標本にします。標本を顕微鏡で観察しながら、ピンセットを使って解剖し、細かな体のつくりを観察します。特に交尾器は、種類の識別に大切なので、丁寧に観察します。

④ どうやって研究するの？

これまで見つかった種類と比較して、新種であることがわかると、こまかい体の特徴を記述した論文を作成します。専門家による審査をへて、学術雑誌に論文が掲載されることで、新種の名前が認められます。調べてわかったことは、この他にも博物館の展示や国際学会などで発表します。



【図1】今までに
調査した場所

うみっこ トピックス

専門学芸員 草加伸吾 (ギャラリー展示担当)

ギャラリー展示

「近江の博物学者 橋本忠太郎—植物研究にかけた情熱—」

生きている化石として有名なメタセコイアをはじめ、滋賀県に植えた橋本忠太郎^{ちゆうたろう}さんを紹介しよう。忠太郎さんは、明治39年(1886年)蒲生郡日野町十禅師というところで生まれ、「博物学」今でいうと理科の先生だったんだ。滋賀県を代表する博物学者の一人で、石のことや貝のこと、それに動物や虫のことなどさまざまなことに興味があった人なんだ。その中でも植物にはとっても興味があつて、大好きだったみたいだよ。この忠太郎さんは、採集した標本にもとづいて、はじめて県内の植物をくまなく調査研究した人なんだ。

そこで忠太郎さんが見つけたことで名前のついた植物の一部を紹介しよう。たとえばサヤマスゲや、ワタムキアザミ、オウミコゴメグサ、ヤマサワシロギク(写真1)、セイタカタンポポ(写真2)、タナカミザサなど、全部で40種類ぐらいあるんだ。それに忠太郎さんは、植物だけでなく動物や昆虫、石や貝などの標本も集めていたんだ。写真3に写って



写真1 ヤマサワシロギク



写真2 セイタカタンポポ

いるのは、収集物のなかにあつたものだよ。

仕事の合間を見ては野山に出かけて、たくさんの標本を集めた。新聞紙に植物をはさんで作る、気の遠くなるようなたくさんの押し葉標本を作ったんだ。それらの標本をも



写真3 キジやヤマドリ、鉱物や貝などの収集物

と、滋賀県のどこにどんな植物が生えているか(植物相)を明らかにしようとしたんだ。

でもね、この忠太郎さんにもちょっと変わったエピソードがあるんだ。植物収集に夢中になりすぎて、失敗したり何かにまちがわれたり…、それはまだひみつなだけどね。貴重な写真や、ガシャモクなどの今では滋賀県で見られなくなってしまった植物の紹介や植物の標本、それにエピソードを紹介した4コマイラストやデジタルの紙芝居も展示しているよ。ぜひギャラリー展示「近江の博物学者 橋本忠太郎—植物研究にかけた情熱—」を見にきてね。待ってるよ! ※イラスト: 瀬川也寸子

